

「祈りの島 天草とその海」展

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/2920242>

出版情報 : くまもと文学・歴史館報. 5, 2020-03-31. くまもと文学・歴史館
バージョン :
権利関係 :



「祈りの島 天草とその海」展

2019年7月に長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録された。これを機に、当館は「祈りの島 天草とその海」展を9月19日（木）から11月10日（日）まで開催した。

天草は日本（九州）の西端にあり、アジア大陸に最も近い。アジア、ヨーロッパの影響を一番早く受けた。1566年、天草の領主・志岐麟泉が洗礼（ドン・ジョアン）を受けている。キリシタン大名として知られる大友宗麟の受洗より10年ほども早い。

天草ロザリオ館が所有するバッジ・メダイは大分や博多で同じものが出土しており、発掘調査によって16世紀後半の制作と判明している。南蛮寺での十字のあるキリシタン墓碑の拓本も提示し、導入とした。つづく中心には鶴田一郎氏の「天草四郎 祈り」。

続いて島原の乱の古戦場となった富岡城や原城に関する絵図と古文書を展示。今回永青文庫所蔵の一揆側が残した矢文・書状・法度書ほかを展示した。いずれもよくしられた史料で、新出ではないが、たとえば一揆方の渡邊佐太郎が出した書状では

一 志ろやま（城山）の こすへ（梢）ハ

とある初めの文字は、ラテン語（ポルトガル語）の大文字をイメージし、大きく、太い線で絵文字風に描かれる。しかも「志」の字の「士」と「心」の、「士」の「十」の上下左右にかぎをつけて、十字架にしている。実物をみて初めて気づくことである。また「ろ」の字は艚を絵にして絵文字にしていた。キリシタンは籠城していても、信仰心に満ちての余裕があつて、悲壮感が感じられない。

二月朔日付の「益田四郎フランシスコ」の城内からの書状もしられたものだ。文中には「おらしょ」、「ぜじゅん」（絶食）、「じしびり一な」（鞭打ちの苦行）といったポルトガル語が見られる。「殊に今ほどクワレスマのうちと申す」とある「くわれすま」はポルトガル語の **Quaresma** で復活祭の前の四旬、四旬節をさす。復活祭は「春分の日以降の満月の次の日曜日」なので毎年日は変わり、1638年の場合は4月4日で、日本暦では寛永15年2月20日にあたる。西暦2月23日、日本暦では寛永15年1月10日が四旬節の始まりだった。

敵総大将・板倉重昌の敗死（正月1日）を受けてその9日後、意気高揚のうちに四旬節にはいる。キリストの受難、磔刑までの日々を城内では戒律期間とした。復活祭は落城の9日前、苦しいさなかに祝ったのだろう。書状が出されたのは日本暦2月1日である。半ばを過ぎて気持ちは途切れがちだった。書状

には緩みを戒める言葉がある。一揆方の信仰にかけた籠城の日々と、清貧の心情をまことにリアルにしのぶことができる。壮絶な史料であった。

崎津には江戸時代後半の天草崩れの史料が残されており、今回もその一部が展示できた（上田家文書）。Hidden Christian の実態を詳細に示す史料であり、世界遺産登録にあたり、学術的な裏付けとして大いに貢献した史料である。かれら彼女らは「アンメンゼウスマリアさま」、などと唱え、異名（洗礼名）を持っており、まぎれもなきキリシタンであったが、代官所は厳重に処罰することはなく、「心得違い」として、監視は行うが、厳罰に処することはしなかった。日常生活は継続された。

なお会期中、平田豊弘氏（天草のキリシタン～祈りと暮らし～）と服部（世界文化遺産に登録された天草・崎津集落の歴史と文化）による講演があった。

（服部英雄）